

在日フィリピン人の日本社会における生活適応に関する研究：配偶者の国籍別比較から

平野(小原), 裕子
九州大学医療技術短期大学部

<https://doi.org/10.15017/289>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 27, pp.83-88, 2000-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン：

権利関係：



在日フィリピン人の日本社会における生活適応に関する 研究:配偶者の国籍別比較から

九州大学医療技術短期大学部
平野(小原)裕子

The Social Adaptation of Filipino Migrants in Japan — A Comparative Survey by Nationality of Spouse —

Yuko Ohara-HIRANO

International marriage couples in Japan have drastically increased recently. Those who have married to Japanese and have resided in Japan are expected to highly adapt to the Japanese society, while Japanese society is expected to establish a social system in order to support them.

This study was conducted to obtain data on characteristics of Filipino-Japanese international marriage couples through comparing them with those of Filipino couples in Japan.

The survey result shows that Filipinos who marry to Japanese have higher level of Japanese proficiencies ($p < 0.05$), and obtain bigger number of emotional support ($p < 0.01$) and tangible support ($p < 0.01$) than those who marry to Filipinos. On the other hand, level of dissatisfaction of working environment ($p < 0.05$), leisure ($p < 0.05$), daily information ($p < 0.05$), living condition ($p < 0.01$) are higher in the Filipinos who marry to Japanese than their counter parts respectively.

This shows that life satisfaction of Filipino migrants is indicated by some socio-economic factors aside from number of social support or life satisfaction.

Key Words : Filipino, Migrants, International marriage, Depression, Adaptation

Ⅰ はじめに

昨今のわが国において、在日外国人の定住化傾向は著しく、ことに日本人と結婚する者の数が急増している⁽¹⁾。異なる文化的背景を持つ夫と妻との結婚によって形成された家族は、その家族または地域社会に多様な文化を持ち込む存在と言える^(2,3)。すなわち、家族のライフサイクルの各段階において、夫婦各々が持つ文化的背景に基づいて夫婦単位、あるいは家族単位での意思決定がなされていくわけであるが、こと単一性の社会といわれてきたこれまでのわが国において、ライフサイクルの各段階で文化的背景の違いに根差した様々な葛藤が生じてきたことについては、先行研究に事欠くことはない⁽²⁻¹²⁾。

しかし、今日日本に住む全住民の1.18%が外国籍である⁽⁴⁾という数字をみても、わが国が多文化共生社会に移行しつつあるのは避けることのできない現状といえよう。従って、日本人との結婚を通じて日本社会に多様な文化を持ち込む彼ら・彼女らは、多文化共生社会を目指す今後の日本において、非常に重要な役割を果たしうることが考えられる。

本研究においては、日本人との結婚が2番目に多い⁽⁵⁾在日フィリピン人を取り上げ、日本人とフィリピン人の国際結婚夫婦と在日フィリピン人夫婦との比較を通して、彼ら・彼女らの国際結婚の特徴について、生活適応という観点から明らかにすることを試みる。本研究で使われる「生活適

応」とは、従来の社会学における「適応」概念とは異なる。例えば、従来の「適応」概念には、環境やホスト社会とのずれがなくなることをもって「適応」良好と考える傾向があったが、本研究では、主体の側の生活や心身の回復、安定が図れているかどうか重要で、図られている場合を「適応」良好と呼ぶ。また、主体と環境・社会との相互作用関係の主体側への現われである生活に着眼点を置くという意味で「生活適応」としている。

生活適応の度合を測定するためには、調査対象者によって認知されるストレスフルイベントおよび生活不満足度、主観的抑うつ状態および、対処資源を用いた。対処資源とは、慢性的緊張、困難状態に対する防衛機制に基づく対処様式(以下「対処パターン」)および、その対処の過程を適応的に遂行するために用意されている心理社会的資源⁽¹³⁾、また、それらに影響を与えうる要因と定義する。心理社会的資源には、自分に対して重大な支援を与えうるソーシャル・サポートを含む。

II 対象と方法

(1) 対象

本研究の対象者は、日本に在住するフィリピン人である。サンプリングは、関東地方において布教活動を行っている、フィリピン系カトリックミッションの協力を得て行われ、関東地方5県において、フィリピン人に対するミサが行われている20教会のうち、調査協力を得ることのできた12教会を抽出した。次に、これらの教会においてミサに出席している全フィリピン人を対象に調査票を配票した。346名から回答が寄せられ、回収率は、62.3%であった。

本研究では、配偶者が日本にいと回答した者で、配偶者の国籍が日本またはフィリピンと回答した101名を分析の対象とした。このうち、配偶者の国籍がフィリピンと回答した者は69名、日本と回答した者は32名であった。

(2) 方法

本研究では、英語およびタガログ語を併記した自記式無記名の調査票を作成した。日本語能力に

ついては、会話能力、読解能力、作文能力について自己評価により、全くできない、普通、よくできるのいずれかを回答させた。在日フィリピン人のストレスフルイベントおよび生活不満足に関する項目としては、在日フィリピン人労働者に対する質的研究法⁽¹⁴⁾の結果を元に調査項目を作成した。そして慢性的な困難・葛藤・緊張の度合を測定する目的で「全くない」(0点)から「よくある」(5点)までの6段階評価で経験頻度を設問した。また、主観的抑うつ状態を測定するのに自記式抑うつ尺度 CES-D⁽¹⁵⁾を採用した。CES-D スケールは、抑うつ状態と他の変数との関連を明らかにする研究において、最も頻繁に使用される尺度の一つであることが指摘されている⁽¹⁶⁾。移民の研究^(17,18)でも使用され、因子妥当性が実証されている⁽¹⁷⁾。また CES-D スケールは、身体的症状を尺度項目に多く取り込んでいること、アジア系移民は精神症状を身体化する傾向があること、という理由から、アジア系アメリカ人の抑うつ傾向を測定するのに適していると指摘されている⁽¹⁸⁾。従って、日本におけるアジア系の在日外国人の抑うつ傾向の指標として適用することは妥当であると思われる。

調査票は、内容妥当性、基準関連妥当性⁽¹⁹⁾を検討するため、個別および集団でのバックトランスレーションやプリテスト⁽²⁰⁾を繰り返した後、対象者に対し、調査の意図を説明して配票した。

以下の統計処理は、PC版統計パッケージ SPSS 6.1Jを用いて行った。統計手法としては、カイ乗検定、T検定、Mann-Whitney U検定を行った。

III 結果

1. 属性

本研究の対象者の属性については、配偶者の国籍と、回答者の性別とのあいだに有意な差がみられ、($p < 0.001$)、日本人男性と結婚しているフィリピン人女性の割合が、フィリピン人男性と結婚しているフィリピン人女性の割合よりも高い傾向が見られた。一方、配偶者の国籍別に回答者の平均年齢および平均在日期間を比較したが、有意な差は見られなかった。

また、配偶者の国籍別に回答者の日本語能力

(会話能力, 読解能力, 作文能力)を比較したところ, 日本語読解能力および作文能力に関しては, 配偶者の国籍別に有意な差は見られなかったが, 日本語会話能力に関しては, 配偶者が日本人である者で, 能力のレベルが高い者の割合が有意に高かった ($p < 0.05$).

2. 生活ストレインの経験

配偶者の国籍によって, 生活ストレインの分布の違いを明らかにしたところ, 仕事の環境に関する不満足度 ($p < 0.05$), 日本人から見下げられる経験の度合 ($p < 0.001$), 日常生活情報に関する不満足度 ($p < 0.05$), 居住環境に関する不満足度 ($p <$

0.01), レジャーに関する不満足度 ($p < 0.05$)の各項目について, 有意な差が見られた。また, 日本人から見下げられる経験の度合に関する項目を除き, 配偶者が日本人である者で, 中央値が低い傾向にあった。

なお, 仕事に関する不満足度, 給与に関する不満足度, 職場の福利厚生に関する不満足度, 職場の日本人との人間関係不満足度, 解雇に関する不安, 日本人同僚からどなられる経験の度合, 日本人との人間関係不満足度については, 配偶者の国籍別には有意な差が見られなかった。

3. ストレス対処パターン

配偶者の国籍によってストレス対処パターンを比較したところ, 有意な差が見られたのは, 抑うつを感じた時にリラックスすることで対処するというパターンであり, 配偶者がフィリピン人である者で, 中央値が有意に高いことが明らかになった ($p < 0.05$).

4. ソーシャル・サポート

配偶者の国籍によって, ソーシャル・サポート(情緒的支援, 情動的支援, 道具的支援)を提供してくれる人の人数を比較したところ, 情緒的支援 ($p < 0.01$)および道具的支援 ($p < 0.01$)について, 有意な差が見られ, いずれも, 配偶者が日本人である者で, 中央値が有意に高かった。

5. 将来について

配偶者の国籍によって, 将来日本を離れる予定の違いを比較したところ, 有意な差が見られ, 配偶者がフィリピン人である者で, 将来日本を離れると回答した者の割合が有意に高かった ($p < 0.001$).

6. 抑うつの経験 (CES-Dの各項目の違い)

配偶者の国籍によって, CES-Dの分布の差を明らかにしたが, CES-D総合得点においては, 有意な差は見られなかった。しかし, CES-D各項目毎に比較してみたところ, 配偶者の国籍によって点数の分布の有意な差が見られたのは, 「過去一週間のうちに食欲がないと感じたことがあった」という項目であり, 配偶者がフィリピン人で

表1 配偶者の国籍別による比較

配偶者の国籍	フィリピン (n = 69)	日本 (n = 32)	p値
属性			
性別(女性)	47.1	93.8	$p < 0.001$
平均年齢(歳)	34.01	32.13	n.s.
平均滞り期間(月換算)	56.79	71.31	n.s.
日本語会話能力(普通-よくできる)	76.5	93.5	$p < 0.05$
日本語読解能力(普通-よくできる)	48.3	56.7	n.s.
日本語作文能力(普通-よくできる)	42.1	56.7	n.s.
生活ストレインの経験(中央値)¹⁾			
仕事に関する不満足度	39.41	44.84	n.s.
仕事環境に関する不満足度	36.82	49.88	$p < 0.05$
給与に関する不満足度	37.16	46.00	n.s.
福利厚生に関する不満足度	35.42	43.68	n.s.
職場の日本人同僚との人間関係不満足度	36.62	46.13	n.s.
解雇に関する不安	37.49	37.55	n.s.
日本人同僚にどなられる経験	41.00	30.27	n.s.
日本人から見下げられる経験	52.45	26.94	$p < 0.001$
日常生活情報に関する不満足度	38.05	51.52	$p < 0.05$
居住環境に関する不満足度	38.99	55.85	$p < 0.01$
日本人との人間関係不満足度	40.61	45.86	n.s.
レジャーに関する不満足度	39.38	50.78	$p < 0.05$
ストレス対処パターン(中央値)²⁾			
感情を押し込める	40.22	38.06	n.s.
何かをして気を紛らわせる	45.37	36.77	n.s.
リラックスする	47.33	35.57	$p < 0.05$
他の人と感情を分かち合う	43.89	33.46	n.s.
ソーシャル・サポート(中央値)³⁾			
情緒的支援(寂しい時慰めてくれる人がいる)	42.42	60.71	$p < 0.01$
情動的支援(病院の場所を教えてくれる人がいる)	49.78	48.90	n.s.
道具的支援(保証人になるよう頼める人がいる)	43.99	59.45	$p < 0.01$
将来について			
日本を離れる予定である	82.4	17.6	$p < 0.001$
抑うつの経験			
CES-D 平均値	16.44	16.88	n.s.

1) 中央値が高いほど, 生活ストレインの経験が高いことを示す

2) 中央値が高いほど, その対処パターンをよくとることを示す

3) 中央値が高いほど, その支援者の数が多いことを示す

ある者で、中央値が有意に高いことが明らかになった ($p < 0.05$)。

IV 考 察

(1) 日比国際結婚夫婦の特徴

本研究では、日本に住むフィリピン人夫婦を対象群として比較することによって、今日の、日本人とフィリピン人の国際結婚の特徴を浮かび上がらせることができた。

まず、日本人の配偶者を持つと回答した者に、女性が有意に多かった点である。これは、日本において最近急増している国際結婚のパターンに、いわゆる「農村花嫁」^(2,3,4,10,11) やエンターテイナーとして来日したフィリピン人女性と結婚する日本人男性が多い⁽¹²⁾ ことを反映していると思われる。

次に、日本人の配偶者を持つと回答した者は日本での定住化傾向が予測される点である。それは、将来日本を離れる予定であると回答した者の割合が、フィリピン人を配偶者とした者よりも有意に低いことから明らかである。本研究では、日本人の配偶者を持つ者はまだ日本での滞在期間が十分に長くはなく、そのためにフィリピン人配偶者を持つ者に比べて、有意に滞在期間が長いという結果が出なかったものと思われる。しかし、今日の国際結婚の急増という現状をふまえ、出入国管理法では、「日本人の配偶者等」という在留資格の更新期間を1年から3年毎までと延長する傾向がある。このことは、日本人と結婚した者は、かなり長期間に渡り日本での滞在が可能となることを意味する。従って、今後、日本人と結婚したフィリピン人の滞在が長期間に渡ると予測されるが、彼ら・彼女らが、生活満足度の高い生活を送ることができる社会態勢を作るために、日本社会が検討しなければならない点は非常にたくさんあると言えるであろう。

(2) 国際結婚とフィリピン人の日本社会への生活適応

次に、日本人と結婚したフィリピン人の日本社会への生活適応の現状について、考察を試みる。

1) 日本語能力

本研究を通じて、配偶者が日本人である者

は、そうでない者に比べ、有意に日本語会話能力が高いことが明らかになった。その理由としては、配偶者が日本人であれば、配偶者やその家族とコミュニケーションを日本語でとる必要が多く、必然的に日本語能力が高くなると考えることができる。

日本語能力とは、自分と他者との関係性において自分の存在や意思を伝える手段であるため、日本語能力が高いことは、生活者の主体性を反映させ、生活適応を高める重要なポイントであると考えられる。この文脈において、日本人の配偶者を持った者は、フィリピン人の配偶者を持った者よりも日本社会への生活適応が促進されていると言いうことができるであろう。国際結婚家族が日本社会に居住する場合、日本人ではない方の夫または妻の日本社会への生活適応が促進されることが指摘されている⁽⁹⁾ が、本研究の結果では、ことに日本語能力の高さという点からそれが実証されたと言える。

2) ソーシャル・サポート

在日外国人にとって、適切なソーシャル・サポートを得ることは、日本語能力と併せ、日本社会での生活適応を促進させるための重要なポイントと言える^(2,3,5,6)。本研究では、情緒的、情動的、および道具的支援の3点からソーシャル・サポートの数を測定したが、配偶者が日本人である者で、情緒的および道具的支援の数が多いことが考えられた。

在日外国人が日本社会での生活適応を促進するためのソーシャル・サポートを得るには、同国人ネットワークを頼ることが指摘されているが⁽²¹⁾、日本人と結婚した女性にあっては、夫やその家族、知人といった日本人がソーシャル・サポート・ネットワークに含まれることが指摘されている^(2,3,5,6)。

本研究の結果は、配偶者が日本人である者で、より情緒的および道具的支援の数が多いことを示したが、このことは、身近な日本人である配偶者やその家族、知人といったネットワークを通じて、より多くのソーシャル・サポートを獲得していることを示唆すると思われる。

(3) 日本社会への生活適応・ストレスフルライフイベントと、生活不満足度

日本人の配偶者を持つ者は日本語能力が高く、またより多くのソーシャルサポートを持っている。従って、フィリピン人の配偶者を持つ者と比べ、日本社会への生活適応を促進させる要素を多く持っていることが考えられる。しかし、生活適応を促進させる要素をたくさん持っていれば、日本社会での生活不満足度が低い、とは必ずしも言えないようである。

このことは配偶者の国籍別に、日本での生活不満足度を比較すると、配偶者が日本人である者において、より仕事環境、日常生活情報、居住環境、レジャー等の不満足度が高いという傾向が明らかになったことからその点が伺える。配偶者が日本人である者の場合は、今後日本で定住することが前提であることを考えると、冷静に日本社会を見ることができるようになり、様々な問題点も見えてくるため、相対的に不満足度が高くなると考えられる。

また本研究の結果は、ストレスフルイベントの経験が多いからと言って、必ずしも生活不満足度が高いとは限らないことを示唆した。例えば、配偶者がフィリピン人の者は、配偶者が日本人の者に比べ実際に日本人に見下げられる経験が多いが、生活不満足度では、いずれの項目においても、配偶者が日本人の者よりも生活不満足度が低いことが明らかになった。

このことは、生活不満足度の認知は、ストレスフルイベントの経験頻度にかかわらず当人の置かれた社会的な立場に規定されうること示唆している。ここで社会的な立場というのは、日本に限りなく長期間滞在することができる在留資格を持つかどうか、と言い替えてもよいであろう。例えば、配偶者が日本人の者は、結婚生活の続く限り、あるいは日本人の実子を養育している限りにおいて、日本に滞在し続けることが可能である。一方、配偶者がフィリピン人の者は、在留資格の期限が終了すれば、あるいはオーバーステイの者にあっては摘発された時点で、いずれ日本を離れなければならないことになる。後者においては、半

永久的に日本に滞在することができるとは限らない、という点で、「黄金の国ジパング」に生活すること自体が生活不満足度を低く認識させると考えられる。

(4) 抑うつと対処パターン

本研究の結果からは、配偶者が日本人である者が日本社会への生活適応要素を多く持っているからといって、抑うつが有意に低いという結果はみられなかった。これは、認知される抑うつには対処パターンなど、様々な因子が関わってくることを示し⁽²²⁾、生活適応要素だけが抑うつを規定するのではないことを示唆している。

抑うつを感じたときにとる対処パターンについては、配偶者がフィリピン人である者で、リラックスする対処パターンをとることがより多いことが明らかになった。「リラックスする」といった対処パターンは、在日フィリピン人を対象とした質的研究法⁽²⁴⁾では、在日フィリピン人が抑うつを感じた時によくとる対処パターンである。また、この対処パターンは、抑うつに対する効果的な方法の一つであるとも言われている⁽²³⁾。従って、配偶者がフィリピン人である者は、配偶者が日本人である者に比べ、より効果的な対処パターンをとる傾向があると考えられる。

配偶者の国籍別に、抑うつへの効果的な対処パターンのとり方に差が見られることについては、日本人とフィリピン人の国際結婚における夫婦関係が、抑うつを感じたときにリラックスするという対処パターンをとりにくくしていることと関連があると思われる。日本人の配偶者を持つ者の家庭では、自分の持つフィリピン文化および、配偶者の持つ日本文化の双方が存在する。これらの文化の差異は、日常生活の習慣から子供のしつけ方にいたるまで、生活のいろいろな分野において様々な葛藤を生み出す。その葛藤が夫婦間に緊張関係を生み出し、抑うつを感じたときに、リラックスするという対処パターンをとりにくくさせていることが考えられる。

V おわりに

本研究では、配偶者の国籍別に、日本社会への

生活適応の度合を比較検討した。その結果、以下の点が明らかになった。

まず、日本人の配偶者を持つ者は日本語能力が高く、また日本におけるソーシャル・サポートの数が多きことから、日本社会への生活適応が高いこと、あるいは生活適応を促進させるための条件がよいことが考えられた。一方、生活適応のための条件が揃っていても、生活不満足度や抑うつ認知が低いとは限らないことも明らかになった。生活の満足・不満足、あるいは主観的抑うつの決定因子には、生活適応度以外の因子が働いていることも考えられるため、今後、この点について、さらなる分析が必要となる。

なお本研究では、調査対象者を教会に出席しているフィリピン人に限定せざるを得なかった。教会とは在日フィリピン人にとって重要なネットワークのコアとなるところである⁽²¹⁾。また、配偶者が日本人の者にあつては、日本人配偶者やその家族の理解がなければ教会に出席することが困難であることを考えると、問題は教会に出席することができない者に発生しやすいと思われる。

従つて、今後の研究方針としては、教会に出席することのできなかつた者をも含め、夫婦の婚姻期間、現在の夫婦関係などの項目を制御変数として扱い、さらなる分析が必要となると思われる。

参考文献

- (1) 在留外国人統計(平成10年版), 入管協会編, 入管協会, 1998年。
- (2) 国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族—, 桑山紀彦, 明石書店, 1995年。
- (3) ジェンダーと多文化—マイノリティーを生きるものたち—, 桑山紀彦編, 明石書店, 1997年。
- (4) 農村家族の結婚難と高齢者問題, 光岡浩二著, ミネルヴァ書房, 1996年。
- (5) 国際結婚と子どもたち—異文化と共存する家族—, 新田文輝著, 明石書店, 1992年。
- (6) 異文化へのストラテジー—国際化の時代と相互発展, 文化と人間の会編, 川島書店, 1991年
- (7) Breger, R. and Hill R. Eds., Cross - Cultural Marriage: Identity and Choice, BERG, 1998
- (8) Asian Women in Migration, Battistella G. and Paganoni A. Eds., Scalabrini Migration Center, 1996
- (9) 見えてきた日本—私たちの国際結婚—, 岐美子ハウエル著, 花伝社, 1993年
- (10) 「むら」と「おれ」の国際結婚学, 日暮高則著, 情報企画出版, 1989年
- (11) 農村と国際結婚, 佐藤隆夫, 日本評論社, 1989年
- (12) 妻はフィリピーナ, 寺田靖範, 話の特集, 1994年
- (13) 生活ストレスへの対処, 山本和郎, 垣内出版, 1985年
- (14) 在日フィリピン人出稼ぎ労働者の精神不健康に関する研究, 平野(小原)裕子, 九州大学医療技術短期大学部紀要, 26号, 11-26頁, 1999年
- (15) Radloff, L.S., The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population, Applied Psychological Measurement, 1; 385-401, 1977.
- (16) Mc Dowell, I. And Newell C., Measuring Health: A Guide to Rating Scales and Questionnaires. Oxford University Press, 1996.
- (17) Kuo, W.H., Prevalence of Depression Among Asian-Americans, Journal of Nervous and Mental Disease, 172; 449-57, 1984
- (18) Kuo, W. H. and Tsai, Y. M., Social Networking, Hardiness and Immigrants' Mental Health, Journal of Health and Social Behavior, 27; 133-149, 1986.
- (19) 実証研究の手引き—調査と実験の進め方・まとめ方—, 古谷野亘, 長田久雄著, ワールドブランニング, 1995年
- (20) 保健・医療・看護調査ハンドブック, 東京大学医学部保健社会学教室編, 東京大学出版会, 1992年
- (21) フィリピン人, 平野裕子, 新来外国人がわかる事典, 駒井洋編, 明石書店, 1997年
- (22) Lazarus, R. S. and Folkman S., Stress, Appraisal and Coping, Springer, 1984
- (23) うつの論理, D. ヴィドロシェ, 古川冬彦訳, 岩波書店, 1987年